ネクロノミコンの継承者

石座木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネクロノミコンの継承者

【Ｎコード】
Ｎ０２６９Ｚ

【作者名】
石座木

【あらすじ】
どこにでもいる平凡な高校生、目黒尊。ある事をきっかけに、彼は想像もしていなかった世界の裏側と、異能者達に関わりを持っていく。
『深書ネクロノミコン』の存在は、稀有な運命をどこまでも呼びこむ。

第一話　『宗教家』栗栖野ミサ

目黒尊（めぐろみこと）は公立の高校に通う、どこにでもいる普通の男子高校生だ。
勉強もスポーツも平凡の域を出ない、部活動にも参加していない帰宅部で、多くの高校生が浪費する日常を、そのまま形作ったような日々を送っていた。
そんな彼にも、転機とも言うべき事柄がその日に起こった。
高校二年の夏休み明け、始業式の日にやってきた転入生が、放課後の校舎裏に尊を呼びだしたのだ。
転入生の名は栗栖野ミサ、ハーフらしく色素の薄い髪と肌にすっきりとした目鼻立ちの美少女で、この時期にめずらしい転入生という事もあり、すぐに話題になった。
なぜその栗栖野ミサに呼び出されたのか、その理由を尊は解らなかった。それほど社交的な性格では無い彼は、転入生と積極的に関わろうとは思っておらず、打ち解けようとする者達とは一線退いていたからだ。
だが、栗栖野さんに呼び出された事で、目黒尊の心の内には一抹の期待が膨らんでいた。
放課後、校舎裏、転入生、呼び出し、そんなキーワードから健全な男子高校生が連想するのは、おそらくただ一つ。
彼が縁自分にはの無い世界だと思っていた、青春というやつだった……実際に行ってみるまでは。

（……どこで間違ったのかな。どうしてこうなった？）
自問自答しながら、尊は現在の自分の置かれている状況について考えてみた。
今尊は、どういう訳か十字架に磔にされている。場所は校舎裏、正面には彼をここに呼び出した栗栖野ミサが居る。

（十字架……まず何でここにこんなものが？　第一、来たときには無かったよこれ）
　等身大というのか、身長よりも少し大きめのその十字架に尊の身体は貼りついていた。
（どういう原理で貼りついてるのかな、これ。釘で打ち付けられているわけでも、縛られているわけでも無い、磁力とか粘着力とかでもなさそうなのに、まったく体が動かない……）
　何がどうしてそうなっているのか、等身大のその十字架は、不思議な力が働いているみたいに、尊に身じろぎひとつさせてはくれなかった。
「ねえ栗栖野さん……これ、なんだろう？」
　いくら考えても、その十字架については答えが出なさそうだったので、尊は目の前にいた栗栖野ミサに問いかけてみた。
　もちろんこれは栗栖野ミサにとっても、意味不明な出来事であるとは思っていたが、自力でこの現状を脱するのは無理と判断していた尊は、彼女が誰か助けを呼んでくれることを期待していた。
　しかし、尊の期待はまたも打ち砕かれた。
「この状況でその冷静さ、やはり貴方も一般人ではないのですね」
「え？」
　質問には無視で返し、栗栖野ミサは尊をそう断定した。
「いや、どこをどう見ても一般人でしょ？　僕ほど自分を平凡と自負するものは、他にそういないと思うよ？」
　冷静だという基準で彼女がそう判断したのなら、それは大きな間違いだ。尊は内心では今すぐにでも叫びあげて、誰かに助けを求めたい。
　それをしないのは、目の前に栗栖野ミサが居るから。綺麗な子を前にみっともない所を見せたくないという、少し情けない自制心が働いているからだ。
「偽らなくても結構です。私は貴方の事を、周囲を欺いている事を知っています」

「え？」
何故かどんどんと、栗栖野ミサの中での尊のイメージが断定されていった。初対面に近い筈なのに、彼女の口調は、尊の全てを理解しているというような含みさえ感じられた。
（……ひょっとして栗栖野さんって、電波系？　だとしたら、いくら美人でも関わりたくないぞ）
なんとなく彼女からは、関わり合いになるべきでは無い空気が感じられた。しかし、そうは思っても、この現状で頼れるのは栗栖野ミサだけだというのも確かな事だった。
「……とりあえず、僕が周囲を欺いてるとか、一般人かどうかはさておいてさ。どういう訳か、僕今この十字架に貼りついていて動けないんだ。悪いんだけど、誰か助けを呼んできてもらえないかな？」
単刀直入にそう頼むことにした。これならいくら電波な相手にでも、伝わるだろう。
しかし、尊の期待は三度砕かれる。
「質問があります。真実を、心して答えて下さい」
「いや、聞けよ！？　頼むから聞いてくれよ僕の話も！！」
清々しいまでの無視に、とうとう尊はみっともなく叫びあげてしまった。しかしそれにも栗栖野ミサは、眉一つ動かさない。自分のペースを崩さない。
「この問いの、返答如何によっては、貴方はこの場で神の裁きを受けます。注意しておくのは一つ、偽れば無事では済まないという事だけです」
そう言って、栗栖野ミサは手のひらサイズの十字架を一つ、制服のポケットから取り出した。
（いやいやいや、神？　裁き？　いよいよもって、関わり合いになりたくない相手だぞ……）
尊の中で、宗教というものに忌避感があった。前に家に宗教の勧誘が来て、それが異様なしつこさで断るのに一苦労であったというのと、ニュースの特番で宗教詐欺について報道されていたのを見た

事があったからだ。
　それが一部の側面からしか見ていない偏見であるというのは、解っている。宗教が人の心に潤いやゆとりを与える事もあるだろう、それを生きがいにしている人が居る事も知っているし、尊にそれを否定する権利も気も無い。
　だけど尊は栗栖野ミサという少女から『神』という言葉を聞いた時、思いっきり引いた。それはきっと、尊の深層心理の中で現状と結びつくものがあったからだろう。
　十字架に磔にされる、そのイメージがとある神と重なっていたから。
（……まさかね）
　この場に呼び出したのは栗栖野ミサ、電波な事を言って十字架を取り出した栗栖野ミサ、十字架に磔にされている尊を前にしても、異様なまでのマイペースさを発揮している栗栖野ミサ。
　それを全てプラスして、イコールで結ぶ。
「……もしかして栗栖野さん、これは君がやったの？」
　尊は磔にしている十字架をさして、栗栖野ミサにそう問いかけた。
「ええ、もちろん」
　ようやく彼女から返って来たまともな返答は、尊としては否定してほしかった最悪の言葉。
　そして栗栖野ミサは近づいて来て、その手を尊の身体の中心に向かって伸ばした。
「――！？」
　尊は自分の目が信じられなくなった。栗栖野ミサが手に持っていた十字架が、自分の胸に突き刺さるのを見て、それが真実と認識できなかった。
　その理由は、突き刺さった十字架の感覚が感じられなかったから。どう見ても尊の胸に半分程埋まった十字架は、何の痛みも触感も与えていない。
「『十字架の裁き（ホーリークロスジャッジメント）』、罪人か否

か、全ては神の公正な裁きの元に……」

混乱極まる尊を前に、栗栖野ミサはあくまで自分のペースを崩さない。淡々と落ち着いた声音で、彼女は尊には理解できない言葉で問いかけた。

「……では問います。『深書ネクロノミコン』は何処にありますか？」

その時の栗栖野ミサの問いが、目黒尊の平凡な生活を一変させるきっかけだった。

第二話　『魔術師』風雲寺凍夜

「……では問います。『深書ネクロノミコン』は何処にありますか？」
「はい？」
栗栖野ミサの言葉は、それまで以上に目黒尊の脳を疑問で溢れさせた。
「『深書ネクロノミコン』は何処にありますか？」
（いや、二度も言われても……何て？）
意味不明な言葉に、そう言いかけたが。自分の自由を奪っている者を前に、滅多な事は言えない。
「あの……日本語でお願いします」
聞き覚えの無い、ネクロの何とかという単語はきっと外国語か何かだと思い、尊はもう一度聞き返した。栗栖野ミサはハーフだから、きっと日本語の苦手な所もあるのだろうと。
「固有名詞に日本語も何もありません。そのような誤魔化しはしないで、早く答えなさい」
苛立つような命令口調で、栗栖野ミサは鋭い目つきで尊を射貫いた。
「……そんな何なのかも解らないものが、何処にあるのかなんて知る訳ないじゃないか」
そんな栗栖野ミサの意味不明な問いかけよりも、尊は自分の胸に半分埋まっている十字架が気になってしょうがなかった。
確かに存在しているように見えるのに、まるで幻のように感触の無いそれが、尊にはとても気持ちの悪いものに感じた。
「……変ですね」
訝しげにそう言う栗栖野ミサ、どう考えても変なのは貴方です。というのが間違いない尊の本音。
「貴方は目黒命さんでお間違いないですか？」

「そうだよ、君が呼び出したんじゃないか！　……今更人違いだったとか言わないよね」
　でもこの際、人違いならばそれはそれで願ったりなのかもしれない。十字架に磔にされて訳も分からないまま、意味不明な事を言われるこの状況から一刻も早く解放されたかった。
「いえ、やはり間違いないです……しかし何故……」
　そんな尊の願いは届かないように、栗栖野ミサは、尊の胸に半分埋まった十字架を見つめながら、首をかしげた。
「……嘘を吐けば裁きが下るはずなのに――そこに居るのは誰です！？」
「え？」
　何かに気付いたように振り返って、栗栖野ミサは背後から現れた人物に向かって叫んだ。
「なんでこんな場所に結界があるのかと思ってきてみたら、何か面白そうな事をやってんのな、おまえら」
　現れたのは耳と鼻と口に合計8個のピアスを付け、改造制服という格好で登校する、筋金入りの不良。
　それだけ強烈な見た目だから、尊はすれ違った事があるくらいの、その男の顔を憶えていた。
男の名前は風雲寺凍夜（ふううんじとうや）、尊の同じ学年の隣のクラスで、『歩く校則違反』とも呼ばれていた。
「……貴方は、魔術師ですね。ここは神前です、貴方の様な邪な者が近寄って良い場所ではありません」
　いきなり風雲寺に向かって食って掛かる栗栖野ミサ。なんというか、彼女の辞書には物怖じという言葉は無いのだろう。
「邪ね、魔術師がここにいちゃ駄目なら、あんたが魔力で具現化してるその十字架は何だ？　俺の常識で言えばそれも立派な魔術だぜ？」
「これは神の加護による『奇跡』。魔術などという邪なものとは一線を画す神聖なもの、一緒にされるのは心外です」

尊を置いてけぼりにして、二人の間で不思議な会話が始まっていた。
魔術とか魔力とか聞こえてくる怪しい単語は、尊は漫画やゲームからしか聞いたことが無い。だが、二人の物々しい雰囲気は、そういう娯楽作品の話をして、親睦を深めているようには見えなかった。
「奇跡ねえ……そうやって無抵抗の人間を拘束するのが奇跡なら、俺にも奇跡が起こせそうだな」
（あ、良い事言った風雲寺くん）
だがこの状況、ひょっとしたら尊が望んでいた助けとは、彼のことかもしれない。そう思い、見た目はかなり怖く見える風雲寺に、尊は恐る恐る頼んでみる事にした。
「風雲寺くん、見ず知らずの君に頼むのもなんだけど、見ての通り困ってるんだ。助けてくれないかな？」
「るせえよ一般人。俺はこの女と話してんだ、てめえは黙ってろ」
しかし風雲寺は見た目通りな不良らしく、尊はあっさりと一蹴された。そしてかなり凄みのある人睨みを貰い、尊の心は折られた。
「風雲寺凍夜……『魔葬一族』風雲寺家の落ちこぼれですか」
栗栖野ミサが何気なく呟いたその一言は、この場の空気を一変させた。
空気が凍ったという表現があるが、実際に息が白くなって、校舎や地面に霜が降りたのは、本来そういう意味で使う言葉じゃないだろう。
「……てめえ、いまなんつった？」
風雲寺のどすの利いた声、誰がどう見ても怒っているのが解る。
「落ちこぼれと言いましたが、何か？　貴方も自覚があるように見受けられますが、図星をさされて腹が立ちましたか？」
挑発するように続ける栗栖野ミサ、正直なところ見ているだけしかできない尊は、かなり胃が痛くなっていた。
「――っ！！　許さねえ」
風雲寺の怒りに呼応するように、冷え切っていく空気。そして彼

が手をかざすと、氷の塊が空中に浮かび上がった。
「……」
栗栖野ミサは無言で尊の胸に埋まっていた十字架を引き抜く。尊の胸はそれが埋まっていた形跡もまるでなく、全くの無傷だった。
（……とりあえず、良かった。穴が開いていたら、流石に死んでたよな）
実感が無さ過ぎて、そこまで考えていなかったから、今更になってかなり恐ろしい事をされていたのだという感情が湧いてきた。
しかし、まだだ、安心するのは早い。何が何だか尊には理解が追いつかないが、目の前で対峙している二人の気配は尋常ではない事は解る。
尊の本能はさっさと逃げろと警鐘を鳴らしているが、生憎と尊を磔にする十字架は残ったままである。
「くらえよ！！」
風雲寺の気合いと共に、空中に浮いていた氷の塊が弾丸のように栗栖野ミサに向かう。
氷の大きさは小石程度だが、その勢いでぶつかれば、下手したら大怪我を負うだろう。
「あぶ――！？」
尊が反射的に危ないと叫びそうになった時、それは起こった。いや、何も起こらなかったというのが正しい。
確実に栗栖野ミサに向かっていた氷は、空中で見えない壁に阻まれるかのように、粉々に砕け散った。
「……これが魔術ですか、これなら冷蔵庫の方が、まだマシな氷が出来上がりますよ。落ちこぼれさん」
嘲笑するように吐き捨てる栗栖野ミサ。
それに伴って怒りのボルテージを上げていく、風雲寺凍夜。
「――上等だ！！　本当の魔術、見せてやらあああああ！！」
今度は先程の氷の礫とは、比較にならない程の質量をもつ巨大な氷柱が、その切っ先を栗栖野ミサに向けて生み出される。

それも一つではなく、四方八方を囲むように、尊の視界から栗栖野ミサが見えなくなる程、埋め尽くされた。
（あれが、魔術……）
そしてようやく尊は実感した。漫画やゲームの世界でしか、存在を認知していなかったその概念が、目の前の現実に存在する事を。
「氷葬だ！！　後悔しても、もうおせえぞ！！」
興奮状態にあるように、肩で息をしている風雲寺が猛ると同時、視界いっぱいの氷柱が全て栗栖野ミサに襲い掛かる。
その暴力の結果は間違いなく死、こんな普通の高校の校舎裏で、そんな舞台が繰り広げられるなんて誰が想像するだろうか。
（……でも、なんだろうな）
それを、尊は冷めた目で見ていた。栗栖野ミサが死ぬ事がどうでもいいわけじゃない、どういう訳かそれで彼女が死ぬところを、どうしても想像できなかった。
そしてそれは一瞬で現実になる。
「――な、に！？」
ただ一人、その状況が信じられない風雲寺が驚いている。
巨大な氷柱が、またも一瞬にして全て粉々になる。さっきの氷の礫は見えない壁にぶつかったようだったが、今度はしっかりと何に阻まれていたのかが、尊には見えていた。
半透明な光る障壁。どこか神々しさを感じるそれに守られて、その中心で十字架を握る栗栖野ミサは無傷であった。
「貴方程度の魔術では、神の加護を受ける私に、傷を負わせる事は一生不可能です」
そして一歩踏み出す栗栖野ミサ。あわせて一歩退く風雲寺の表情は、何か異形の者に対峙したかのような恐怖に染まっている。
「く、くるな」
「……そして私は怒っています。貴方の様な者が神前に土足で入り込んだこと、大義ある儀式を邪魔した事……そして何よりも神の奇跡を軽んじた事を」

栗栖野ミサはそう言いながら、手に持っていた掌サイズの十字架を掲げた。
するとその十字架は、尊を磔にしている物と同じくらいのサイズに巨大化した。
「これは神罰です。『十字架の裁き（ホーリークロスジャッジメント）』御安心なさい、神の慈悲は貴方の命を奪ったりはしません」
「ひ、ひ、ぎゃあああああああああ！！」
巨大な十字架は、風雲寺の身体を貫く。尊の時のように十字架に実態は無いようだが、風雲寺くんは苦痛の叫びをあげ、やがて失神した。
栗栖野ミサは風雲寺から十字架を引き抜く。やはり外傷は見られない。
「その痛みは、貴方の罪。だがその程度で済んだことを、貴方は神に感謝するべきです」
そう言って十字を切り、天に祈りを捧げると、栗栖野ミサは目黒尊の方に振り向いた。
「……では続きを」
やはり尊は解放されないらしかった、しかしそれよりも今は気がかりな事がある。
（……うるさい）
ずっと聞こえていた。
（……うるさい）
ある言葉を聞いた時から聞こえていた声。
（……うるさい）
それが頭に響き渡るほど大きくなったのは、魔術の存在を認識した時。
＜試してみろ＞
「――そんな！？　どうしてそれがここに！？」

栗栖野ミサが身を怯ませる。その視線の先には一冊の本。
尊の身体の自由を奪っていた十字架は崩れ去り、その手には見知らぬ本が一冊開かれていた。
＜試してみろ＞
尊の頭に響き渡るうるさい声は、その本から聞こえて来ていた。
「今すぐその本を閉じて！！」
栗栖野ミサはそう叫ぶが、その前に一つやらなければいけない事があった。
「……うるさい声を黙らせるには、これしかないみたいだ」
空気が冷え切っていく、そして空の上に集まる大きな力。
「【第二百二十一項　氷結】さあ、僕を殺せ」
尊が空の上に生み出した氷塊は、風雲寺が生み出したものとは比較にならない程の巨大さと密度を誇った。
そしてそれが、そのまま尊に向かって落ちる。その先を想像するとすれば、ミンチになった自分の姿。

＜初めてにしては上出来か＞

そう言い残して、うるさかった声は聞こえなくなった。
尊の手にあった見知らぬ本も、いつの間にか消えていた。
「……どうも、ありがとう」
尊は光る障壁に守られて、氷の中に埋まっている。
「どういたしまして」
物凄い近くから聞こえてくる栗栖野ミサの返答に、尊が照れなかったのは、きっと彼女の事が嫌いだったからだと、そう自覚した。

それが、目黒尊が初めて災厄の魔道書である、『深書ネクロノミコン』を使った瞬間だった。

第三話　『魔道書』ネクロノミコン

目黒尊（めぐろみこと）は暗闇の中に立っていた。
周囲のどこを見渡しても闇、一つの光も届かないその場所は全く現実感が無い。
それもその筈で、そこは尊の夢の中。眠りに落ちた者が見る、深層心理の世界。
（……随分と陰気な夢だなあ）
尊は自分の夢をさしてそう思う。どうせ見るなら、闇しかないようなつまらないものでは無く、もっと楽しい物が見たいというのが当然であろう。
（……お？）
その願いが通じたのか、尊の前の景色に変化が生じた。闇しかなかった空間に蝋燭の火が一本灯り、そしてその光は見知らぬ人物を照らし出していた。
「初めまして」
いきなりその人物に声をかけられて、尊はかなりドキリとした。いくら夢の中ででも、知らない人間から声をかけられるのは緊張が伴う。
「……あ、どうも」
尊は軽く会釈をして、すぐにその場を立ち去ろうと思った。どうしてかその人物と関わってはいけない、そういう意識の訴えが聞こえてくるようだったから。
だが、意思に反して尊の足は動かない。
「……そんなに慌てないで、折角会えたのだからお話をしよう。目黒尊くん」
「どうして僕の名を？」
咄嗟に聞き返してしまったが、尊の夢の中の事なので、別に不自然では無い筈だった。

「そう、キミの夢の中だから私がキミを知っていても不自然では無い。だが、キミがそれを不自然だと思ったのはちゃんと理由があるよ」
そう言ってその人物は、いつの間にかその場にあった椅子に腰かけた。
「私という存在の記憶はキミには無いから、だからキミの名を私が呼んだことは不自然に思えたのだろうし、私がキミの夢の中に存在する事も違和感を覚えている筈だ。夢という深層心理の中だからこそ、キミの知らないものは存在できないのだからね、それが経験であっても想像であろうとも……」
正直その人物が何を言いたいのか、尊にはさっぱりだったが、一つだけ聞きたいことがあった。
「あなたは誰ですか？」
尊の単純な疑問に、その人物は薄く笑って答えた。
「私は私の名をネクロノミコンとしている。これは創造主が付けた二つとない名前だ……いや、実際には無数にある訳だがね」
いやに含みのある言い方をする人だが、名前はネクロノミコンというらしい。
（……ん？　ネクロノミコン？）
尊にはその言葉を、つい最近聞いた記憶があった。
それは昨日、尊のクラスに転入してきた栗栖野ミサに問われた事。
『深書ネクロノミコンは何処にありますか？』
その時は何を言っているのかさっぱりわからなかったが、固有名詞であると栗栖野ミサが言っていたのも覚えている。
「そう、彼女がキミに問いかけたのは私の事だ。災厄の魔道書であるこの私のね」
「はい？　災厄の魔道書？」
いきなり何を言いだすのかと、尊が首を傾げると、突如としてその人物が視界から消える。
「――！？」

「おっと、驚かせたようだ。人の姿では想像できないだろうから元の姿に戻ったのだけど、要らぬ気遣いだったかな？」
一冊の本が椅子の上に置いてあり、さっきまで尊が話していた人物の声が、その本から聞こえていた。
「……いくら夢だからって、意味不明すぎるよ」
本と喋りたいという願望は尊には無い。そもそも、尊はそれほど本が好きな訳では無く、家の本棚には本の代わりに、ゲームソフトがびっしり詰まっているくらいだ。
「確かにこれは夢だけど、実は現実でもある。私という存在は現にキミの現実に影響を与えているからね」
「影響？　……それって、栗栖野さんの事？」
「それ以外に何かあるかい？　キミが彼女と関わりを持ってしまったのは、私の存在あっての事だ。そうでなければ、キミは一生あのような異能者と巡り合う事は無く、平々凡々とした日々を送っていただろうさ」
椅子の上の本は、まったく微動だにしていないのに、声ばかりが溢れてくる。
「……どうして、僕はネクロノミコンなんて知らない。魔道書だか何だか解らないけど、そんなものと僕は、初めから関係ない話じゃないか」
「それは違う……キミと私は表裏一体、あるいは二心同体。同じ器を共にする魂源で結びついた存在だ。それが関係ないとするなら、キミと私はどちらも存在しない事になる」
ネクロノミコンはそう否定する。やはり、何が言いたいのかが尊にはさっぱりだった。
「表裏一体だとか二心同体だとか、何を言っているんだ？　僕はネクロノミコンなんて知らないし、聞いたことも無かったんだ」
「それはキミが私の事を忘れていたからさ。いや、私をキミに継承させた人物が忘れさせたから……だからこそ、これまで平凡な日々をキミが過ごす事が出来ていたんだ」

そう言ったネクロノミコンは、今までの落ち着いた声音とは少し違い、昂ぶっているようだった。
「……本当に忌々しい奴だよ。あいつはキミから記憶を奪い、そして更に私に対して封印を施した。おかげでこれまでの十年、私は開かれる事が無かったのだから、書物としてこれほど屈辱的な事は無かった」
「あいつ？」
「きっとキミは思い出す事は無いだろうね。それだけあいつの呪いは強くはたらいているし、本来は常人程度の魔力しか持たないキミには、到底打ち破れる物じゃないからね」
「何の話をしているんだよ、僕にも解るように言ってくれ！！」
ネクロノミコンの言葉は、どれ一つとっても尊の理解を超えている。
「……焦る必要は無いさ。もうキミは私を開くことが出来たのだ、後は少しずつ読み進めて行けばいい。最後まで読み終えた時、キミは私の全てを理解するだろうからね、本というものはそういうものさ」
そう言うと、ネクロノミコンは浮かび上がり、ひとりでに尊の目の前まで進んできた。
「……なんならここで少し読んでいくかい？　夢の中だが、私とキミの結びつきを考えると、おそらく現実に戻っても忘れる事は無いと思うよ」
ネクロノミコンのページが尊の目の前で勝手にめくられていく。それはまるで本がおどけているようであった。
「いや、読まない。ネクロノミコンだか何だか知らないけど、得体のしれない物を取る気には慣れない」
尊はネクロノミコンから視線を外し、はっきりと拒絶する。
「それは残念。私のような本の幸福は、所有者に読んでもらう事なのだけど……仕方ない、強制したくないしね。でもキミならもう一度、私を開いてくれると信じてる」

「……僕は何度も同じことは言わない」
「そうかい、それじゃキミの眠りを妨げるのも悪いし、この夢も終わりにする事にしようか。でも一つ聞いていいかい？」
「……なんだよ」
少しうんざり気味に尊は答えた。本と話すというのも、思いのほか違和感を感じるもので、大分疲れていたのだ。
「どうして死のうとしたんだい？」
「――！？　それは……」
ネクロノミコンが尋ねているのは、尊が初めてネクロノミコンを使い、魔術を発現させた時の事。
尊は生み出した巨大な氷塊で、自分自身を押しつぶそうとした。それは自殺行為以外の何ものでもない。
「もしその理由が解らずに死のうとしたのなら、もしかしたらそれもあいつの呪いなのかもしれないな……」
言葉に詰まった尊から何かを察したように、ネクロノミコンは独りごちる。
「……ボクが死のうとしたのは、お前のせいじゃないのか？」
尊はおぼろげだが憶えている、自分が魔術と呼ばれる特殊な力を行使した事、そしてその時に自分の手には、今目の前にある古びた本を持っていた事を。
「確かにキミが魔術を発現させたのは、魔道書としての私の助けがあったからできた事だ。そう考えると、私のせいとも言えるが、しかしそれとキミが衝動的に死のうと思った事は別問題だ。あの時の魔術は、キミの確固たる意志の下で発現したものだったのだからね」
「……」
ネクロノミコンの言っている事は事実で、あの時の尊は自分の意志で死のうとしていた。しかし後になって考えると、どうして死のうとしていたのか理由が解らない。
「私はキミに死んでもらうのは困るんだ。読んでくれる者を失うのは、私の本としての本懐が遂げられない事を意味するからね……」

「……それじゃ、どう――――！？」
尊の目の前に、ノイズの様なものが走る。同時に、話そうとしていた言葉が出なくなった。
「ああ、もう時間が来てしまったようだ。もう少し話していられると思ったんだけど、これで一旦お別れだ……」
ネクロノミコンは、ひとりでに捲られていたページを閉じて、椅子の上にポトリと落ちる。
「……また会おう、今度はどこかの頁でね」
その言葉が響くと同時に、尊は夢から現実へ、容赦なく引き戻された。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

けたたましく鳴り響く目覚まし時計、自分の周りに三つも置かれたそれを順番に叩いて、目黒尊は目を覚ました。
「……最悪の目覚めだ」
ぼんやりした顔で、溜息と共にそう吐き出したのは、目覚まし時計がうるさかったせいでは無い事だけは確かだった。
「……変な夢、いや現実なのかな」
ネクロノミコンと名乗る変な本と対話した夢、しかし夢で済ませるには尊の身に起こった事と、不自然なまでにリンクしていた。
「……とりあえず朝飯作らないと」
考えて、しかし考えても解らない事だと判断した尊は、解っている現実に目を向ける事にした。
今日は金曜日で、当然ながら学校に登校しなければならないという事。
そして一人暮らしの忙しい朝を、尊はいつも通りに過ごしていった。

第四話　『百科事典』索川一弓

帯瀬間市という若干田舎の町、そこが目黒尊(めぐろみこと)が住まい過ごす場所。そして尊の自宅から徒歩で一時間の場所に、彼が通う公立四条高等学校がある。

流石に毎日往復に二時間も歩くほど健康的では無い尊は、通学に自転車を使っている。

それなりに余裕のある時間に家を出て、少しばかり朝の目覚めの悪さを解消できた尊は、軽快に自転車のペダルをこいでいた。

そして、尊が通学路の半分ほどを通過した時、視界に見知った人物の背中が映った。

「おはよ、索川さん」

その人物は索川一弓(さくかわひとゆみ)という尊と同じ学校の女生徒。クラスは違うが学年と委員会が同じ事で、尊にとっては接点の多い相手だった。

「おはよう、目黒くん。朝から元気に挨拶してくるなんて、鬱陶しい事この上無いわね」

索川は挨拶をしてきた尊の方を見ずに、携帯電話の画面を見つめながらそう答えた。

毒の混ざった挨拶に苦笑いしながら、尊は一旦自転車から降りて索川の隣を歩く。

「今日もいい天気だね」

「……何か用なの？」

鉄板の天気の話題から入ろうとした尊に、索川は携帯電話の画面に視線を張り付けたまま、不機嫌そうにそう聞いてきた。

「いや、用って用は無いけど……索川さんと通学路で会うなんて珍しいからさ、どうせなら一緒に行こうと思ってみたんだけど……迷惑かな？」

「それ自体は別に迷惑じゃないけど、それが昨日委員会の仕事を私に押し付けた事のご機嫌伺いなら、かなり迷惑かな」

「う……」
索川の指摘は大体七割くらい合っていて、尊は言葉に詰まる。淡々とした喋りで、淡々と歩く索川だが、視線が携帯電話にずっと向かっていて目が合わない為、感情が全く見えない。
ちなみに索川の吐く、毒のある言葉は誰に対してもそれがいつも通りなので、それで量る事も難しい。
「あの、昨日はありがとう。どうしても外せない用事だったからさ……」
「だからそういうのはいいわ。気にしないで、委員会はいつも通り暇だったし」
気を遣ってくれているのか、それとも単純に拒絶しているのか、索川の淡々とした言葉尻はどう取って良いのか難しい。
だが、ここで自転車で走り去るのも、後々気まずくなるような気がする為、尊は何か話題が無いか考えながら、索川の隣を自転車を押して歩く。
「……それ、何を見てるの？」
結局気の利いた話題が何一つ浮かばなかった尊は、索川が目を離さない携帯電話を指して尋ねた。
これは索川と接するうえで、一番取りやすく、一番取りたくない逃げ道でもある。
「インターネットの百科事典サイト。目黒くんは知っているでしょ、私の性癖を」
「う、うん。まあね……」
性癖とまで本人が言う索川一弓の中毒症状。それは常に百科事典を見ていないと気が済まない、そこに書いてある全てを記憶したいという欲求らしかった。
インターネットの百科事典サイトには、古今東西のあらゆる知識が詰まっており、そして常日頃から次々と新しい書き込みがあり、事項が増えていくらしい。それを読み、読み続けていくのが策川にとっての生きがいであり、その為に高校生活のほとんどを費やして

いる。
　正直に言えば、活字を見ればすぐに眠くなる尊には、全く理解できない趣味だった。
「ちなみに今は『三百人委員会』についての項目を見ているわ。今話していた委員会繋がりでね」
「……そうなんだ、中々洒落た使い方をしているね」
「そうでしょう？」
　索川の言葉が少しだけ上機嫌に聞こえるのはきっと、尊の気のせいではないのだろう。
「何なら読み上げましょうか？」
「い、いや、遠慮しておくよ」
「そう……」
　ここで了承すると、延々と興味の無い話を聞かされ続ける事になるのを尊は知っていた。だが断った時の、索川の少し残念そうな横顔に何だか悪い事をした気になってしまう。
（だからこの話題は危険なんだよな……）
　百科事典には尊の好きなゲームの項目もある為、運が良ければ盛り上がる事もある。周りに壁を作っている索川と、まともに話せるようになったのは、それがきっかけだったりもする。
　だが、それも外れた以上、本格的に話す事が無くなってしまった。
（……というか、僕は何でこんなに必死になって、索川さんの機嫌を取ろうとしてるんだろうか？）
　先日の引け目もあるが、そこまで拘るべき事では無いように思う。気にするなとも言われた事だし。
　それでも、尊は自転車を押しながら、決して速くない索川の歩調に合わせて歩く。なんとなく、このまま先を行くのはもったいない気がしていた。
（……索川さんて、結構美人なんだよな）
　携帯電話に視線を落としている為に俯き気味だが、その横顔は充分に見蕩れるレベルだ。実際に、見ているだけでちょっと幸せな気

分になってくる。
「……さっきから何を、人の顔をじろじろと見ているの？　気味が悪いわよ」
あまりにも見過ぎたためか、索川も尊の視線に流石に気付いた。
「う、ごめん。あ、でも索川さんを見ていたのは、その……聞きたいことがあって」
しどろもどろになりながら、男らしくない誤魔化しを口にする尊。結構必死だった。
だが、その苦し紛れの尊の一言に、索川一弓は予想以上の反応を見せる。
「何？　私に聞きたいこと？」
口調は淡々としているが、尊の予想以上だったのは、索川がこちらを向いて視線を合わせてきた事。
その表情も、ちょっとどころではない程に嬉しそうに見える。
「な、何で急にこっちを見るの？」
索川と目が合う何てことが初めての事だったので、尊はかなり戸惑っていた。綺麗な顔が見つめてくるという事もあり、かなり照れてしまう。
「実は私、目黒くんのような無学な人に、自分の知識をひけらかすのが大好きなの。だから何でも聞いて」
「……頼むからもう少しオブラートに包んでよ」
無学とか言われたのが、尊の心に突き刺さった。あと、ひけらかすという表現は酷過ぎる。
（……まずったな、これは）
物凄い期待を込めた目で見てくる索川。誤魔化しで言った事なので、本当は聞きたいことなど無い、なんて言えばそれがどのくらい冷めたものに変わるだろうか。
（何か……何か聞かないと……あ！？）
答えに窮していた尊の脳裏に浮かんだ、あるキーワード。
「えと……ネクロノミコンについて、とか？」

昨日今日知ったばかりの言葉が浮かんだのは、完全に苦し紛れだが。索川でも知らないだろうと思っていたそれについて、見せた反応は意外なものだった。
「ネクロノミコン？　目黒くんにしては意外な事を聞いてくるのね」
「え？　知ってるの？」
「魔道書と呼ばれるものの中では割と有名よ？　この百科事典にも項目があるわ」
そう言って、携帯電話の画面を尊に見せる索川。
「……う、活字がいっぱい。眠くなる」
「ああ、そうだったわね。じゃあ私が代わりに読むわ」
「あ、待った。出来れば掻い摘んでほしいんだ、索川さんそういうの得意だよね？」
ざっと見た感じ、結構項目が多かったので、全て読み上げられても憶えられる自信が無い尊は、そうお願いする事にした。
（……にしても意外だ）
索川がネクロノミコンを知っていた事もそうだが、ネクロノミコンというものが有名らしいという事実も、それを知らなかった尊には意外な事だった。
だがそれはインターネットの百科事典サイトに項目があるだけに、間違いない真実なんだろう。
（……無学って言われるのもしょうがないのかも）
少し落ち込みつつ、考えを整理している索川の言葉を待つ尊。
「……じゃあ、まず概要から。ネクロノミコンとは、ある作家が創造したクトゥルフ神話という架空の神話体系に登場する架空の書物で、本来は実在しない物よ」
「本来は？」
「そう、本来はね。その作家自身がネクロノミコンに関する来歴を、資料中で言及しているけど、それはあくまで設定であって正史じゃない。例えば７３０年にダマスクスで書かれた『アル・アジフ』が原典になっていると書かれているけど、それは作中の正史であって

現実に起こった事では無いわ。他にも１０５０年に総主教ミカエルにより焚書処分となる、とかそういう設定はあるけど、聞きたい？」
「あ、いや、現実に起こった事じゃないならいいかな……」
「なるほど、目黒くんは現実に関連した事が知りたいのね。なら、そうね……１９７３年に贋作と明言された上で『アル・アジフ』が出版されているとか。２００４年には作中の引用を全て盛り込んだ、再現度の高い『ネクロノミコン　アルハザードの放浪』が出版されているとか。こういう情報から察するに、ファンによってネクロノミコンと銘打った再現本は世界中で数多いと思われるわね」
「そうなんだ……オリジナルは作品の中にしかないけど、偽物は世界中にいっぱいあるのか……」
「所詮は百科事典に書いてある事と、そこから私が読み取った推測よ。過度の期待はしないでよね」
「いや、ありがとう。正直僕にはさっぱりな事だったから、索川さんに聞いて本当に良かったよ」
　実際、意外な所からネクロノミコンについて知る事が出来て、尊にとってはかなりの収穫だった。
「べ、別に……私はただ自分の知識をひけらかしたかっただけよ、勘違いしないで」
　そう言って、また視線を携帯電話の画面に戻す索川一弓。その頬が紅潮しているように見えるのは、尊の気のせいだろうか。
「そうだ、昨日の事も含めて、今度何か奢るよ。何が良い？」
「昨日の事は別にいいんだけど……そうね、なら購買のメロンパンで」
「了解だよ、今日……は、ちょっと先約があるから、明日の昼にでも買って索川さんの所に持っていくよ」
「明日は休みだけど？」
「……そうだった、なら週明けでいいかな？」
「ふ、別にいつでもいいわ。それよりも目黒くん、携帯電話を持つ気はないの？」

「え、何で？」
「何でって……今はネットにも繋がるから、さっきみたいな調べ物も自分でできるし、何より友達と連絡を取るのに不便じゃないの？」
そういう指摘を索川から受けるのは意外だった。何せ話している時も、携帯電話から目を離さないような接し方だから、友達は居ないんじゃないかと尊は勝手に思っていた。
「うーん、不便と思った事は無いからなあ」
「……私が不便なのよ」
「あ、そうか、調べ物を頼まれる事は迷惑だよね……ごめん、今度からはどうにかして自分で調べてみるよ」
「そうじゃなくて、むしろそれはもっと頼ってくれていいわよ。それよりも……やっぱりいいわ、何でも無い」
「……？」
呆れたように嘆息する索川に、訳も分からず首を傾げる尊。それを見て、今度はあからさまに不機嫌になる索川。
「……メロンパンは二個で」
「ん？　うん、いいよ」
「あと、学校までその自転車に乗せなさい」
「あ、はい」
索川の妙な迫力に押されると、命ぜられるがままの尊。
実はゆっくりし過ぎていたせいで、ギリギリの時間になっていた為、索川を乗せた二人乗りの自転車を、尊は必死に漕ぐ羽目になった。

第五話　『神使』栗栖野ミサ

目黒尊（めぐろみこと）は憂鬱な気分で階段を上っていた。
午前の授業が終わり、昼休みの時間。それは学生にとって苦痛でしかない授業の合間の、憩いの一時。
（……こんな気分で、昼休みを迎えるのは初めてだよ）
尊が足取り重く階段を上るのには理由がある。
それは、栗栖野ミサに呼び出されたから。正直なところ、尊にとって二度と関わり合いになりたくない相手であり、それに応じるのも拒否したいところだった。
しかし、そう言っていられない事情もある。
先日に栗栖野に呼び出された際に見せられた光景と、尊自身の変化。それを理解する為には、栗栖野と向き合う事も必要だと尊は感じていた。
（……そもそも、昨日はあの後逃げ出しちゃったからな）
魔術だとか、奇跡だとか、現実味の無いものを見せられ、そして自分自身がそれを行使したという事実に、尊は混乱をきたして、あの場を全力で逃げ出した。
それを栗栖野が追いかけてくるような事は無かったが。今日の朝、尊が登校すると栗栖野は、昼に学校の屋上で会いたいと告げてきた。
その呼び出しの理由は、十中八九先日の呼び出しと同じものだろうが、先日と違う点は尊が『ネクロノミコン』というものに、少しだけ興味が出てしまっている事。
昨夜見た夢の事もそうだが、栗栖野がそれに拘る理由も知っておきたい。そうしなければならないと思うのは、少しの好奇心と期待。
（平凡な生活。それに不満なんてなかったけど……）
今の目黒尊には、昨日の一件で知ってしまった非日常への好奇心も確かにあった。それが危険なものだとしても、未開の土地に踏み入れてみたいという気持ちは誰にでもあるだろう。

（……それに、知らなければいけない。そんな気がする）
ネクロノミコンとは何なのか、そして栗栖野ミサが何者なのか。
それを知らなければ、今後の学校生活にも大きく響いてくる。
（でも、栗栖野さんか……正直、ちゃんと会話できる自信がないよ）
昨日話した限りでも、かなりぶっ飛んだ性格だという事だけは、容易に理解できた。それを思うと、尊の足はもう一段重くなるが、それでも止める事は無く階段を上がっていく。
「逃げちゃ駄目だな、うん」
結局どうあっても、栗栖野とは教室で顔を合わせてしまう。最初から逃げ場など無かったのだが、尊は前向きに自分で決意したと思った事にした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

尊が階段を上りきると、いつも鍵がかかっている筈の屋上の扉が開いていた。どうやって開けたのかは考えないようにして扉を開け、屋上に赴く。
そこにはフェンスに寄りかかって分厚い本を読んでいる、栗栖野ミサの姿があった。
栗栖野は尊が来た事に気付くと、その本を閉じて会釈をした。
「呼び出しに応じて頂いてありがとうございます。立ち話もなんですから、こちらで座って話しませんか？」
そうして手招きする栗栖野の言う通りにする事は、尊には少し抵抗があった。
「……心配しなくても、昨日のようにいきなり体の自由を奪うような真似はしません。今日は話だけをするつもりで来ましたから」
「いや、それなら立ち話でいいよ。栗栖野さんの近くに行くのは、まだ僕には抵抗があるから」

昨日の仕打ちを思えば当然だろう。それは栗栖野も解っているのか、近づこうとせずに少し遠めの距離で話し始めた。
「昨日は、あの後何か変化はありましたか？」
「……何もないよ」
変な夢は見たが、栗栖野ミサは夢の話をするような気やすい相手では無い。昨日の行為の意図も、その目的も解らない、尊にとっては敵に近い存在。
だから尊は出来るだけ自分の事は話さずに、栗栖野から情報を引き出したいと考えていた。
「昨日の事はしっかりと憶えていますか？」
「憶えているよ。栗栖野さんに呼び出されて、十字架に磔にされて、意味不明な質問をされて、その後風雲寺くんが現れて栗栖野さんと戦っていた……全部、憶えてるよ」
尊のその返答に、栗栖野は首を振った。
「私が聞いているのはその後の事です。貴方が『深書ネクロノミコン』を手にして、発現した魔術で自殺しようとした時の事です」
「それは……」
同じことを夢の中でも聞かれたが、あの時どうして自殺しようと思ったのか、尊には解らない。自分の意志でそうしている事ははっきり憶えているが、尊にはその理由がいくら考えても見つからなかった。
「……それに応える前に、僕から聞きたいことがあるんだ」
「なんでしょう？」
「『ネクロノミコン』が何なのか、それを教えてほしい。あと、それが僕に何の関係があるのかもね。栗栖野さんの問いに応えるのは、その後でもいいかな？」
尊がこの場に赴いた目的は、栗栖野からそれを聞き出す為。まずは、その目的を果たしておくべきだと考えた。
栗栖野のペースに任せては、昨日の二の舞になりそうであったし。何より尊だけ喋らされて終わり、なんて状況にならない為にも。

「それは後でお話しするつもりでしたが……いいでしょう、お話しします。その前に目黒さん、貴方はネクロノミコンについて、どこまで知っていますか？」
「……なんとか神話の、架空の書物だってのは聞いたことがあるけど？」
つい今朝、人伝で聞いた話で自信はあまりないが、尊は憶えている限りで答える。
「なるほど、一般的なネクロノミコンの知識はあると……では『深書ネクロノミコン』については何か知っていますか？」
「深書？」
「ええ、数あるネクロノミコンの贋作の内の一つです。その様子だと、やはりご存じなかったようですね」
「贋作……つまり偽物だね」
今朝索川に聞いた話の中に、それについても少しだが触れていた。
「そうです。しかし、偽物と言っても、それは魔道書としての力を持つ……いわば本物のネクロノミコン」
「偽物なのに、本物？　ちょっと意味が解らないけど」
「……普通、魔道書の贋作はそれに憧れる素人が作り上げるもので、何の力も無い唯のアンティークの域を出ないものですが。『深書ネクロノミコン』は力のある魔術師が作り上げた、本物の魔道書としての力を備えた物なのです」
栗栖野はそう言って、尊の身体の中心を指差した。
「そして『深書ネクロノミコン』は今、貴方の中に存在しています」
「はい？」
尊は栗栖野の指に誘導されるように、自分の身体を見るが、特に何もなくいつも通りの制服姿が見えるだけ。
「中と言うのは、体内の魂源の部分の話です。貴方の精神は深書ネクロノミコンと結びついている。昨日貴方がそれを用いた時に、私は理解しました」
「魂源だとか精神だとか、一体何の話？　本の話をしていたのに、

何でそんな事になるの？」
「元々深書ネクロノミコンは、魔道書としてのその危うさから焚書処分とされた物です。しかし、その時には既に魂が宿っており、深書ネクロノミコンは本という媒体を捨て、魂だけの存在になりました」
「……魂って、えーと、幽霊とか精霊みたいな感じ？」
尊は栗栖野の言葉を何とか理解しようと、ゲームで得た知識からそれっぽい言葉を抜き出した。
「そうです。日本の古くからある民間信仰の観念から言えば、付喪神といったところでしょうか？　物に人格や魂が宿るという話は、それほど稀な事では無いのです」
そんな話は初耳に近かったが、尊が知らなかっただけで、栗栖野の知る限りではよくある話なのだろうか。
（物に宿る人格や神様か……つまり、深書ネクロノミコンは本の精霊って感じなのかな？）
どうにもしっくりこないが、そう思えば夢でネクロノミコンと名乗った本が、言っていた事と合致する気がした。
（……夢の中のネクロノミコンも、表裏一体あるいは二心同体と、栗栖野さんが言うように魂源で結びついた存在だと言っていた）
「つまり、僕はネクロノミコンの精霊に憑りつかれているって事？」
幽霊とか精霊だとかという話をそっくりそのまま信じたわけでは無いが、栗栖野の話を尊なりに解釈するならそういう事になる。
「そうですね、そして深書ネクロノミコンに関して、私が知っているのはこの程度です。私は魔術師でも精霊使いでもないので、本の内容については何も知りません。ですが……」
栗栖野は一度言葉を区切り、険しい面持ちで尊に告げる。
「深書ネクロノミコンは魔術師の間でも、禁書指定にされるほど危険な物です。一説によれば魔術の深淵を記されている事が、深書と呼ばれる由縁だと言われております」
それがどれだけ危険な物なのか、尊には解らないが。栗栖野の表

情から、彼女がネクロノミコンをどれだけ危険視しているのかが見て取れた。
「……そんな物が、どうして僕の中にあるの？」
「それは私にも解りません」
「え？　なんで？　僕は昨日まで、ネクロノミコンの事なんて何も知らなかった。でも栗栖野さんは僕よりもネクロノミコンについて詳しいし、何よりも昨日呼び出したのはそれについて、僕を問い詰める為だったじゃないか」
　今思い出しても、色んな期待を踏みにじられた事は若干腹立たしいが。それを差し引いても、尊とネクロノミコンとの関わりを最初から知っていたかのような、昨日の栗栖野の言葉と矛盾すると思ったのだ。
「確かに、私は貴方と深書についての関わりを、ある程度は知っていました。しかしこの目で見るまで、深書が貴方の魂と結びついているという事は知りませんでした。主に命じられた事に、そこまで深い内容について知らされていなかったのです」
「主？」
　何やら雲行きが怪しくなってきたことに、尊は戸惑いながらも尋ねる。
「はい、私は主より頂いた『天啓』によって、貴方が深書と関わりのある人物だという事を知りました。そして私が貴方と接触したのも、『深書ネクロノミコンを手に入れ、決して誰にも渡してはならない』という主の言葉を守る為でした……」
「……主って、誰の事？　もしその人が僕とネクロノミコンについて何か知っているなら、教えてもらえるのかな？」
「主とは、我らが神の事。そして残念ですが、私のような『神使』であっても、神に直接語りかける事は不可能です。神は滅多な事でこの世界に干渉はしませんし、天啓として神の言葉を頂けるだけでも、この上ない光栄な事なのです」
　主という言葉が出てきた時点で何となく予想できた展開、栗栖野

ミサは尊が思っていた以上に、神というものへの信仰が厚いらしい。
（……それ以前に『天啓』に『神使』か、また知らない言葉が出て来たよ）
なんとなく聞き疲れてきた気がするが、それでも尊は嘆息しながらその言葉の意味を栗栖野に尋ねる。
正直なところ、あまりそこは踏み入りたくない世界だが、栗栖野について知っておくのは重要な事だと割り切る事にした。
「『天啓』とは神からのお告げで、信仰の厚い者だけが聞くことが出来ると言われています。それは多くの場合、何らかの試練を与えられることが多いです。そして『神使』とは、読んで字のごとく『神の使い』です。天啓によって授かった試練を神の代行として実行する、それが神使たる私の務めです」
「そ、そうですか……」
尊の苦手な宗教についての話であり、正直それ以上は聞きたくない。とりあえず、これ以上尊に有益な話は無い、という事だけは理解できた。
それが通じたのか、栗栖野は話を戻す。
「では、先程保留にした事についてお答えください。貴方が昨日、深書を用いた時に自殺しようとしたのは、貴方の意志ですか？」
「……いや、僕の意志じゃない、と思う」
曖昧な答えになったのは、尊もまだ答えが出せていないから。応えないでおくことも考えたが、栗栖野はここまで尊の問いに全て答えていたので、無視はできなかった。
栗栖野ミサはどう思ったのか、一度頷き考えるような素振りを見せた。
「そうですね、あの後は自宅に帰った後もすぐ眠ったようですし。起きて登校するまで、そのような素振りは一度も見せなかった。やはりあれは深書によるものだったのでしょうか？」
（うん？　今何か、栗栖野さんがおかしな事を口走ったような気が……）

栗栖野ミサの言葉を、尊が理解できない事は多いが、理解できる言葉でおかしな事を言われた気がした。
「何か、今の言葉だと昨日は一晩中、僕を見張っていたように聞こえたけど？」
「ええ、当然です。深書を宿す貴方を放っておく訳にはいきませんから。ちゃんと追跡して、見張らせていただきました」
栗栖野ミサは当然のように、そう言った。
「ちょ！？　それってストーカーもびっくりの違法行為じゃないの！？」
見張りという行為の度合いにもよるだろうが、それは正直詳しく聞きたくは無かった。
「申し訳ありませんが、これも天啓を全うする為です。ですが安心して下さい、そのような事はしないで済むように手は打ってあります」
「いや、そういう問題じゃ……ああ、もう」
栗栖野の恐ろしくズレた考えに、尊はやっぱりコイツはおかしいと思いながら。それ以上の言及は無駄と知り諦めた。
「その手ってのは何？」
「知り合いの『魔祓い師』を呼んであります。魔祓い師とは悪霊や憑き物を落とす者の事で、深書と貴方の事を話したら、力になれるかもしれないと言っていました」
またしても知らない言葉が出たが、栗栖野はご丁寧に説明も交えてくれたので、尊が尋ねる手間は省けた。
だが、栗栖野の紹介と言うだけでも、尊は嫌な予感がしてしょうがない。
「……そんな勝手な事ばかり言われても、僕は良いとは一言も言ってないよ？」
「それではずっと監視される生活を送りたいのですか？　貴方がその身に宿す物は、放っておいて良いような代物ではありません。それは用いた貴方が一番良く解っているのでしょう？」

「それは……」
確かに危険な物だという事は解っている。栗栖野とは意識の違いこそあれ、それについてはおおむね同意だ。
だが、尊には栗栖野が許容できない。
「でも僕は栗栖野さんが信用できない。昨日の僕に対する行いが、その理由だ」
いきなり十字架に磔にされ、よく解らない力で胸に十字架を埋め込まれたりした。一応無傷ではあったが、そんな事をしてきた相手を簡単に許せるほど、尊は出来た人間では無い。
「昨日の事については謝ります。あれは深書が貴方と関わりがある事を主から聞き、貴方が魔術師であると誤解していたから。それについては、本当に申し訳ありません」
そう言って、素直に頭を下げる栗栖野を見て、尊は若干揺らぐが、それでもストーカー行為も含めて、謝罪は全然足りていない。むしろ謝って済む問題を超えている気がした。
「……正直に言えば栗栖野さん、僕はキミの神だなんだという宗教じみた考えも、キミ自身の事も嫌いなんだ。できれば、もう関わりたくない」
だから尊は、はっきりとそれを口に出す事が出来た。厳しい言葉で、言った尊自身にも重くのしかかる辛い言葉だが、今が言う時だと思った。
「僕の事は僕が自分で何とかする。キミの力は借りないし、借りたくない。だから放っておいてくれないか」
「――しかし!!」
「ネクロノミコンについて知っているのは、僕とキミ……あと居るのか知らないけど神様だけだろ？　なら、キミがそれを隠しておけば僕は今まで通りに平凡に過ごせる。後は僕がネクロノミコンを使わずにいればそれで終わりだよ」
そもそも尊には使い方さえも解らない。だから誰かの干渉さえなければそのままで済む話。

「……貴方が絶対に使わない、という保証はありません」
栗栖野のそのあくまで引き下がるつもりは無いという姿勢に、尊は段々と腹が立ってきた。
「元はといえば、栗栖野さんが僕にしたことが原因じゃないのか！？　これまで僕はネクロノミコンなんて知りもしなかったのに、きっかけを与えたのは栗栖野さんだ。キミさえいなければ、僕はきっと今まで通りに過ごせる、だからもう関わるな！！」
後半はもう、鬱憤を晴らすかのように強い口調に変わっていた、そんなに感情を露わにしたのは尊自身が驚くほどだった。
「……」
あるいは栗栖野にとっても、尊の言葉は思っていた事だったのだろう。それに対する反論は無かった。
「……ネクロノミコンについて、色々教えてくれた事にだけは感謝するよ。それじゃ、さよなら」
自分で呼び込んだ居た堪れない空気に耐え切れず、尊は逃げるようにその場を後にする。
栗栖野ミサは呼び止める事も、追ってくる事もせず、その場に立ち尽くしていた。
その後、尊は教室に戻ったが、昼休みが終わり午後の授業を終えても、栗栖野が教室に戻ってくる事は無かった。

第六話　『幼馴染』御堂烈斗

放課後、目黒尊（めぐろみこと）が帰宅の為に教室を出ると、廊下で待ち構えていた男に組み付かれた。
「みっことくーん。あそぼーぜー」
「……なんだ御堂か」
尊が引き剥がそうとしても、ビクともしない力で組み付いてくるその男の名は御堂烈斗（みどうれっと）。尊の幼馴染であり同い年なのだが、この公立四条高校ではまだ一年生で、二年生の尊にとっては下級生という事になる。
同い年なのに学年が違うのは、御堂が出席日数の不足により留年したせいであり。夏休みが終わって二学期も始まった今になっても、御堂は年下ばかりのクラスに溶け込めていないらしく、結構な頻度で一階上の尊のクラスまで遊びに来る。
「親友に向かって、なんだはないだろ。さあ、ゲーセンにでも行って今日も友情を深めようぜ」
「……パス」
「何で！？」
尊にべもなく断られると、御堂は傷ついた表情をしていた。精悍な顔立ちをしているだけに、かなり解りやすい。
「今日はそんな気分じゃないんだ。悪いね」
尊としても嫌だった訳では無いが、今日は遊んでも楽しめないと思ったから。断ったのは、それで御堂まで楽しめなくなるのは申し訳ないからだ。
「何かあったのか？　いつもの辛気臭い顔に磨きがかかってるぞ？」
「別に何もないさ、ゲームのやりすぎで少し寝不足なだけだよ」
「嘘吐け。そう言う時のお前は、授業中にでも睡眠をとるだろうが。なんだよ、俺にも言い難い事で悩んでるのか？　……まさか女に振られたとか？」

付き合いの長さは伊達では無いらしく。尊の誤魔化しなど通じないかのように、御堂はかなり惜しいところを突いてきた。
「いや、違うよ。むしろ振ったのは僕の方さ」
「お前が女を振った？　はは、面白い冗談だな。座布団があれば投げつける所だわ」
「……ひどいね」
そして付き合いが長いからこその容赦の無さ。だが付き合いが長いからこそ、尊が言った事がかなり真実に近い事だと、御堂は思い至らないようだった。
（しょうがないね。僕も誰かにあんな事を言ったのは初めての事だし……）
尊の気分を沈ませているのは、今日の昼休みに栗栖野ミサに言った言葉が原因だった。
感情的になり、感情のままに発した『嫌い』という言葉。
それはあの時も今もずっと抱いている感情だが、ああもはっきりと誰かを拒絶したのは人生で初めての事。
（……なんだろ、思い出すだけで、こう腹の下が重たくなるような気分。自分の言葉は自分にも返ってくるっていうのは、こういう事なのかも）
昼休みが終わっても、放課後になっても栗栖野は教室に戻らなかった。顔を合わせるのは気まずくなりそうだが、顔を合わせないのは、それはそれで色々と気に掛かってしまう。
（……小心者だな僕は、御堂ならこんな事で悩まなそうだけど）
目の前で、尊が悩んでいそうな事を列挙していく御堂。かなりアホっぽい事も口走っているが、それを聞いていると、尊は少しだけ気分が良くなってくる気がした。
「何を笑ってんだ？　こっちはお前の悩みが何なのか、真剣に考えてんだぞ。少しはヒントくらい出せよ」
面白半分でなく、本当に真剣に配してくれる御堂を、本当に過ぎた友人だと尊は思う。

「……悩みは自分で何とかするよ。それよりも行こうか、ゲーセン」
だから尊は、先程の御堂の提案に乗る事を決めた。
「おい、さっき行かねえって……無理しなくてもいいんだぞ」
「行きたくなったんだ。今日が五十円プレイ設定の日だって思い出したからね。御堂が嫌なら、僕一人でも行くけど？」
五十円プレイ云々の話は方便で、本当の所は御堂と一緒なら楽しむことも出来そうだと、尊は思い直したから。
「……お前って結構ずるいよな。そういう所、時々羨ましいぜ」
「僕も御堂の強引な所を、いつも羨ましいと思ってるから、お互い様さ」
「はっ、しょうがないな。お前の悩みについてはまた今度追及するか、次は誤魔化させねえぞ」
そういう時、変に勘ぐってこないのも御堂の良い所だった。引き際を心得ているというか、尊との適切な距離の取り方を弁えている。
やはり幼馴染というのは伊達では無い。
（……これで御堂が女の子なら、完璧なのに）
同性の幼馴染を持つ者全てが思う事だろうが、尊もそれは例外では無い。そしてそれは御堂も思っている事。
同時に溜息を吐いたことで、なんとなく理解しあった二人は、肩を叩きあって階段を下りて行った。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

御堂烈斗は昨年の一年間行方不明であった。目黒尊と共に公立四条高校に入学する日に居なくなり、家族にも行方を掴ませぬまま、ちょうど一年後にひょっこり帰って来た。
その一年の空白の期間について、御堂烈斗は親しい間柄の人間にのみ、こう語っている。

『ちょっと異世界で勇者やってた』
その言葉を聞いて、相手によって反応はまちまちだが、大体殴られるか病院に連れて行かれるかの二通りであった。
だがそれを、幼馴染であり唯一の親友であると認める目黒尊に話した時の反応は、そのどちらでもなかった。
『あ、そう。とりあえずおかえり』
がっかりするほどあまりにも淡白な対応、だが親友のその言葉が本当の意味で、現実に戻ってきた事を実感させた。
目黒尊の言葉によって御堂烈斗は、異世界の勇者ミルドレットとしての物語を終える事が出来た。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

（やっぱり持つべきものは友達かな……御堂と遊んでいるだけで、少しは嫌な気分が払拭された気がするよ）
ゲームセンターで一通り遊び倒し、尊は少し寒くなった財布の中身を気にしながらも、来て良かったと思った。
「いやあ、久々に来たけどランキングスコアが結構塗り替わってたな。バージョンアップされているゲームも多かったし、これはしばらく通って勘を取り戻さないとな！」
御堂は何故かそんな感じで燃えていたが、それはそれで御堂なりの楽しみ方なので何よりである。
「そういや尊のカードのスコア変わってなかったけど、俺と一緒以外でゲーセン行ってなかったのか？」
「そりゃね、一人で行く場所じゃないでしょ？」
「……いや、あっさりと言ってるけど。一緒に行くダチ他に居ないのか？」
「その言葉は御堂にそっくり返すよ。二学期も始まっているのに、

未だにクラスに馴染めないのは恥ずかしいと思うよ」
「うっせえよ、俺だって色々と気を遣ってんだ。それに二年の二学期になっても馴染めてないお前は、更に恥ずかしいだろ」
「うぐ……」
痛いところを突かれて、返す言葉の無い尊。しかし、そういう話をしても傷つかないのは、御堂とは気心が知れているからだろう。
「まあ、俺達は似た者同士なのかもな。気を遣う相手と無理につるむ必要は無いってやつ？　今日遊んでて思ったけど、やっぱり尊はいいな。一緒に居て楽だし、何より同じ事で楽しめる」
「まあね、きっと幼い頃から同じものを見て育ったから、御堂とは感性が似てるのかもね」
二人は小学校一年から付き合いで、それは昨年に御堂が行方不明になるまで途切れる事は無かった。
それだけに、二人が一緒に居る事は当たり前であり、だからこそ二人は他に友人を作るのが苦手だったりする。
「でもまあ、それじゃ駄目だよな。修学旅行という壁がある以上は……」
「……やめてくれよ、それはなるべく考えないようにしているんだから」
後一年の猶予がある御堂とは違い、尊にとってはもうすぐの事である。学校が仕組んだその地獄のイベントの事を考えると、胃が痛くなる思いだった。
「はっはっは、まあ尊なら大丈夫。空気に徹してれば何とかなるさ」
「慰めなら、もう少しましな言葉を言ってくれよ」
軽口を言い合えるのも幼馴染の特権だが、凹むときは凹む。尊は大きくため息を吐いた。
「あ……やべ」
いきなり何かに気付いたように、御堂が尊の背に隠れるが、身長差がある分全然隠れきれていない。
「どうかした？」

尊が困惑気味に尋ねると、御堂は何も答えずに体を縮こまらせながら、強く引っ張る力で尊を物陰に誘導しようとする。
察するに、御堂は一刻も早く、何かから隠れたい様子だった。
「待ちなさい。そこに居るのはレットね」
そしてそれを見透かすように呼び止める声――尊の前には見た事の無い少女が立ちはだかっていた。
「烈斗？　ねえ御堂、キミの知り合いなの？」
「あ、馬鹿ばらすなよ！！」
ばらすも何も、どう見てもバレバレだが。どうやら御堂は、その少女から隠れたかったようだ。
「今日は母上と外食の予定なのに、こんな所で何をしているの！」
そう言って、尊越しに御堂に向かって怒っている少女。どういう経緯でそうなっているのか解らない尊は、しばらくそのまま成行きに身を任せる事にした。
「別にまだ時間はあるだろ？　母さんの仕事だって終わってねえし」
「そうだけど、私との約束は！？　レットがこの国のマナーを教えてくれるって言ってたじゃない。レストランで恥をかいたらどうしてくれるのよ！！」
「そんな高級な所に行くわけじゃねえのに、マナーも何も無いっつの。約束だって、お前が勝手に言ってただけだろ！！」
「確かに私から言った事だけど、レットは確かにうんって返事したわ！！」
「お前がうるさいから適当に返事したんだよ！！」
「なんですって！？」
（なんだろう……これ）
往来で段々ヒートアップする言い合いを続ける御堂と、見知らぬ少女。その間を挟まれた尊は身動きの取れぬまま、通行人から向けられる好奇の視線を浴びせられることになった。
「……とりあえず御堂、落ち着いてよ」
流石に居た堪れなくなってきた尊は、仲裁に入る事にする。この

ままだと言い合いも終わる気配が無い。
「っと、悪い。コイツのせいで、煩かったか？」
少女を指差しながらそう言った御堂だが、どちらかといえば尊の背に隠れた御堂のせいである。
「いいけど、喧嘩ならもう少し場所を考えようよ。キミ達、かなり目立っているよ？」
「え？　あ……どうも」
言われるまで気付いていなかったのか、御堂は通行人からの視線にようやく気付き。とりあえず笑って会釈して誤魔化していた。
「冷静になったなら、僕はもう帰るよ。御堂はその子と約束してるんでしょ？」
少女の事は知らないが、話の流れからなんとなく、御堂にとって親密な相手だという事は解った。
「いや、コイツの事はどうでもいいよ。それよりこの後お袋と飯食いに行くんだ、良かったら尊も一緒に行かないか？　お袋も誘えって言ってたし」
「僕も？」
「ああ、独り暮らしだと飯時は寂しいだろ？　それに俺が居ない間、お袋が世話になったみたいだし」
それは恐らく、御堂烈斗が行方不明になった昨年の事を言っている。御堂家は母子家庭で二人暮らし、御堂が行方不明になって塞込む母親を、尊が元気付けた時期もあった。
もっとも尊にはそんな意識は無く、特別な事は何もしていない。ただ一年間、御堂が返ってくる事を信じて、暇があれば探していただけ。
「……今回は遠慮しておくよ。家族水入らずを邪魔したくないし」
「遠慮すんなよ」
それも少しはあるが、尊が気になったのは、先程の見知らぬ少女が尊をずっと睨み付けている事。
御堂との言い合いの流れから判断して、その子も一緒に行くのだ

ろう。尊へ向けられている視線は『空気を読め』と如実に物語っている。
（御堂も隅に置けないな、いつの間に……）
言い合いもまるで痴話喧嘩のようであったし、少し寂しい気もするがここは断るべきだと、尊は判断した。
「遠慮はしてないよ。どうせなら僕は小母さんの手料理の方が食べたいからさ、その機会に誘ってよ」
「……やめてくれよお袋の手料理とか、俺が作った方が千倍マシだろ」
「まあ、それでもいいよ。楽しみにしてる」
「ああ、解った……」
尊は御堂が納得するように、うまく断る事に成功した。御堂母の手料理をダシに使ったのは心が痛むが、遠慮があると思われるのは避けたかった。
「じゃ、僕は買い物があるからこれで」
買い物と言っても、コンビニに夕食の弁当を買いに行くだけだったが、見知らぬ少女から睨まれ続けるのに耐えきれなかったから。御堂は少し名残惜しそうだったが、尊は構わずそのままここで別れる事にした。
だが、立ち去ろうとした尊をずっと睨み付けていた少女が呼び止める。
「ちょっと待ちなさい」
「な、何かな？」
戸惑う尊に、顔をかなり近くまで寄せてくる少女。何事かと体を硬直させる尊に、少女は一言だけ耳打ちをしてきた。
「レットを貴方の舞台に関わらせないで」
「え？」
その言葉に更に戸惑う尊だが、少女はプイッと顔を背けて御堂の元に駆けて行った。
（……何なんだ？）

意味が解らないが、御堂が心配そうな顔で見て来ていたので、尊は何事も無かったように手を振って別れた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「尊に何を言った？」

御堂烈斗は全身黒で固めた少女に向かって、問い詰めるように尋ねた。

その少女の名はルル。かつて御堂が異世界で勇者をやっていた時に知り合い、この世界に帰ってくる時に唯一、御堂と共に来た人物。

「大したことは言ってないわよ。レットが私の事紹介してくれないから、自己紹介しただけ」

「嘘吐け、尊の奴かなり戸惑った顔してたぞ？」

「そう？　きっと、女性に免疫が無いからじゃない？　彼もレットと同じで童貞っぽいし」

「うるせえよ、お前も処女の癖に何言ってやがる」

「あら、処女と童貞は同列には出来ないって誰かが言ってたわ」

「……いや、そんな談義はどうでもいい。おれは尊に何を言ったのか聞いてるんだ」

ルルが言った事に拘るのは、彼女の言葉が如何に重いものか、御堂は良く知っているから。

そしてルルがそれをあえて隠しているのが、御堂に嫌な予感を与えている。

「レットが彼を心配するならば、聞かない方が良い」

そう言われるとますます気に掛かるが、ルルの言葉の重みを知っているからこそ、御堂は無理に問い質す事はしない。

「どういう事だ？」

「……今言える事は、レットが関われば死人が出るって事。逆に、

関わらなければ死人は出ないわ」
　言葉を選ぶように逡巡したルルが答えたのは、御堂の嫌な予感を的中させた。
「死人って、尊がそんな危ない場面に出くわすって事か！？」
「そうね、でもレットは関わっては駄目。絶対に良い結果にはならないわ」
　全てを知っているように淡々と言うルルの言葉は、御堂に重く伸し掛かる。
　ルルは異世界において『巫女』と呼ばれ、そして一つ特別な能力を持っている。
　それは『災予知（パンドラ）』という、一種の予知能力である。ルルは未来に起こる事を予め知る事ができ、干渉しなければそれは運命のように変わることが無い。
　だが逆に、干渉すれば未来は簡単に変わる。良い方向にも悪い方向にも、その危険性を御堂は良く知っている。
「尊の身に何が起こるか、知るだけでも駄目なのか？」
「レットが知れば、絶対に余計な事をする。本当なら何も言うつもりは無かったのよ？」
「……解った、もう聞かない」
「更に言うなら、目黒尊には金輪際関わるべきではないわよ。それが彼にとってもレットにとっても一番よ？」
「それだけは聞けない」
　キッパリと言い切るのは、御堂烈斗にとってそれだけ大事なものであるから。
「そう言うって知ってたわ……」

　ルルは笑いながら、先に待つ災いの前にある目前の外食を、御堂がどう楽しく過ごせるかをじっと考えた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

（どうしてこうなった？）

目黒尊は最寄りのコンビニの前で、明らかに堅気じゃない男達に囲まれていた。

外国ではマフィア、ここ日本だとヤクザという呼び方が一番一般的だろう。だが、尊はそんな集団に囲まれるような事をしでかした記憶は無い。

「目黒尊だな？　一緒に来てもらおう」

（恐ッ、無理だよもう、色々と）

絶対に行きたくないが、尊に抵抗する余地も胆力も無い。そのまま黒塗りの車に乗せられて、行先も告げられずに連れて行かれた。

第七話　『狂信者』栗栖野ミサ

目黒尊（めぐろみこと）が連れてこられたのは、高級旅館や料亭もびっくりの威厳ある日本家屋。高い塀で囲まれ、入口である堂々たる門構えをくぐると、池や庭石で彩られた庭園があり、その奥には伝統的な外観の木材建築の屋敷が構えている。

近所のコンビニから、車で十数分の所にそんな場所がある事がまず驚きだったが、尊としては建物の事など気に掛けている余裕は無かった。

（僕はどうなるんだろうか……無事に帰れる気が全くしないのだけども）

自分を囲む明らかに堅気じゃない雰囲気の男達、尊はそれに対する恐怖だけで他の事は目にも頭にも入ってこない。

とりあえず手荒な事はされていないが、何の用で連れてこられたのか尊が聞いても、明確な返答は無く「黙って付いて来い」の一点張り。

（逃げ出したい、でも逃げたらきっと……想像しなければ良かった）

とにかく怯えながらも、尊には男たちの後を付いて行く以外に選択肢は無かった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

屋敷の奥の広い座敷まで連れてこられた尊は、そこでまさか知り合いに遭遇するとは思っていなかった為、一瞬だけ恐怖を忘れて口を開いた。

「キミは、風雲寺くん！？」

そこには先日校舎裏に栗栖野ミサから尊が呼び出しを受けた際に、

途中で割って入ってきた風雲寺凍夜の姿があった。
今日は学校には登校していなかったから、もしかしたら昨日の栗栖野にやられた事で、何かしら体に問題が発生してしまったのかと心配であったが（主に尊自身にも関わる事の為）、見た所特に変わりない様子だった。
「気安く話しかけんな」
そう対応してくるのも昨日と変わりない。元々同じ学校の同じ学年という以外に尊との接点はない為、元より友好的な相手だと思ってはいない。
だが、知っている顔があるというだけで、幾ばくかの安心を尊が得られたのもまた事実だった。
「……目黒尊くんだったね、立っているのも疲れるだろう。そこに座りなさい」
「は、はい」
しかし、得られた安心もすぐに緊張で塗り替わってしまった。
敷かれた座布団に座るように尊に促したのは、明らかにこの場において一番の存在感を放っている壮年の男性。
座敷の一番奥の中心に座り、厳めしくも風格と貫録を持ち合わせているその男は、尊をここまで連れて来た男達に向かって言った。
「下がれ」
「へ、へい親分」
尊が感じた緊張は、その男達にとっても同様のものだったらしく、礼儀を正してそそくさと居なくなった。
これで尊以外には、親分と呼ばれた男と風雲寺凍夜、そしてこの場には似つかわしくないビジネススーツ姿の眼鏡の男だけが残った。
広い座敷に四人だけ、元からあった静寂が更に重たくなるのを尊が感じていると、親分と呼ばれた男は一文字に引き結ばれていた口を開く。
「尊くんをここに呼んだのは他でもない。君が持っている魔道書についてだ……」

「……え？」
ここまで何も知らされずに連れてこられた尊は、親分の発したその言葉に驚愕した。
連れてこられた理由がそれだったという事もあるが、何よりも驚いたのが親分の口から魔道書という言葉が出てきた事だった。
（ネクロノミコンの事を言っているんだろうけど……どうして？）
これは自分と栗栖野ミサ以外には知らない事の筈、尊はそう考えた後に、しかしもう一人それを知っている可能性がある人物がいる事に思い至る。
（風雲寺くん！？　昨日のあの場に確かに居た。僕がネクロノミコンを使った時には気を失っていると思っていたけど、まさか見られていたのか？）
尊が風雲寺凍夜に視線を向けると、彼は興味なさそうにそっぽを向くだけ。だが親分の方は尊に多大な興味を持っているようだった。
「君が魔道書を用いて魔術を発現させたのは倅が見ている。ワシもこの目で見に行ったが、魔力の残留が凄まじいものだったよ。その齢であれだけの力……さぞ苦労したのだろう？」
「え？　あ、いえ……」
どうやら風雲寺凍夜は親分の息子であったようだ。しかしそんな事よりも、魔力の残留とか訳の解らない理由で、一目置かれてしまった事に尊は困惑するが、お構いなしに話は進んでいく。
「ワシは君と、君の力を高めた魔道書に同じ魔術師として興味がある。こうして会えたのも何かの縁だ、まずは君の持っている魔道書を少しでいいから見せてくれないかね？」
何かの縁とかでは無く、明らかに拉致まがいな方法で連れてこられた気がしたが、尊には親分相手にそれを追及する勇気はない。
そして親分からの要求に応える事も、今の尊には無理な話であった。
「えと……それはできません」
「……どうしてかね？」

尊に対して親分は威圧的ならないよう、配慮はしているようだったが。隠しきれない元々持ち合わせている雰囲気の恐さは、正面に座る尊に汗を流させる。

カラカラの咽を鳴らしながら、尊は生唾を飲み込んだ。

「ほ、方法が、解らないからです。僕がネクロノミコンを使ったのは昨日が初めてで、どうやって使ったのかも、どうやって取り出したのかも、実はあまり憶えてないんです」

親分の迫力に押され、隠しておく事は自分の身の危険を意味すると思い、尊はありのままを話した。

それが結果として尊の身の危険に繋がるとは、知らなかった事。もし仮に尊に未来を知る力があったなら、違う言葉を選んでいただろう。

その選択が間違いだったと尊が気付いたのは、時すでに遅く。親分の様子が一変した時だった。

「ネクロノミコンだと！？」

威厳あるその表情が動揺に染まり、脇に居る風雲寺凍夜とビジネススーツの男も、親分の豹変に驚きを見せる。

「どうしたんだ親父？」

「ネクロノミコン？　何なんだそれは？」

脇に控える二人の疑問の声に構わず、親分は立ち上がり尊に歩み寄る。その迫力は今まで以上に映り、尊は立ち上がる事すらできずに竦む。

「それはもしかして、深書ネクロノミコンなのか？」

「は、はい」

眼前の厳めしい顔から目を離せずに、尊は肯定する。すると親分は、大きく息を吐いてドスの利いた凄味のある声で尊に告げた。

「……そうか、ならばワシはそれを葬らねばならん」

言葉と共に、親分の周囲から蒼い炎が巻き上がる。どういう訳か、その炎は座敷に燃え広がる事は無かったが、しかし尊はそれが幻でない事を肌で感じていた。

熱い、一瞬にして感じた事の無い熱さが、尊を恐怖に染める。
サウナなど比較にならない、どうしてこれほどの熱を感じながらも、自分の身は火傷の一つも負っていないのか理解できない程だ。
「目黒くん、もし君が今すぐネクロノミコンを取り出せるのならそうしろ。ワシが葬るのは出来るなら本だけに留めたい、倅と同じ年頃の君まで巻き込みたくはない」
親分は本気の目で、尊に最後通告を言い渡す。
「お、親父正気か！？」
風雲寺凍夜は炎の熱から逃げるように退きながら呼びかけるが、親分はまるで取り合わない。
「ワシのこの炎は魂源のみを焼き尽くす。もし深書ネクロノミコンが君の中に潜んでいるなら君の魂ごと葬る事になる」
強さを増す炎、それが尊の周りを渦巻いていく。
まるで一瞬で焼き尽くすその時の為に、最大の火力を求めて猛るように。
（嘘……だろ）
尊は魂で感じるその熱で朦朧となりながらも、それ以上に自分の中から響き出した声に気を取られてた。

＜試してみろ＞

強まる炎と共に、徐々に頭に響いてくる声。昨日、尊がネクロノミコンを使った時に聞こえてきた声だった。
（……これは、この気分は？）
だが、昨日とは違う。あの時の気分とは違うと、尊は確かに感じていた。
その差異はまだおぼろげで、だが少しづつ響いてくる声がその感情を強めていく気がした。
しかしそれがどういったものか尊が気付く前に、親分の発していた炎が消え去り、謎の声もまた少しづつ弱まっていった。

「な、何だこれは！？」
驚愕する声が誰のものか解らなかったが、座敷の中心に突如として出現した巨大な十字架は、ある人物の顔を尊に思い起こさせた。
（栗栖野さん……？）
同時に外から叫び声が聞こえてくる。
「出入りだーーーーー！！」
「女が一人！？」
「囲めえ！　そいつ、ふつうじゃねえぞ！！」
荒々しい物音、その中には火薬の爆ぜる音も含まれ、その喧騒は座敷に向かって近い付いてくるようだった。
そしてとうとう、一人の少女が数人の男と共に座敷の中になだれ込んでくる。
「栗栖野さん！？」
「良かった、無事でしたか目黒さん」
拳銃や刃物を持つ男達に囲まれながら、それを意に介さないように、現れた少女――栗栖野ミサは目黒尊の無事を喜んだ。
「な、なんでここに？」
栗栖野と周りの男達とが友好の様には見えない。そしてこの状況、尊の目には彼女が自分を助けに来てくれたように見えた。
「貴方を助けに来ました」
そしてそれは間違いでは無かった。
たった一人で、尊が竦むしかなかった者達を相手に、栗栖野ミサは対峙している。
修道服姿の彼女が照らす光は、この場においても不思議な安らぎを尊に与えていた。
「栗栖野……だと？　まさか栗栖野ミサか！？」
尊がそう呼んだ事を漏れ聞いたビジネススーツの男が、過剰な反応を見せる。それに伴って親分も表情を更に顰めた。

「栗栖野ミサ……あの『狂信者』がどうしてだ？」
風雲寺凍夜は栗栖野ミサについては話していなかったらしく、二人がその名を知っていた事に逆に驚きを見せていた。
「親父達、あの女の事知ってるのか？」
凍夜のその問いは、次いで聞こえた火薬の爆ぜる音に掻き消された。
それは栗栖野を囲む男達の一人が、拳銃を撃った音。
一時的に静寂が訪れるが、硝煙が上る銃口の先の少女が無傷だと解ると、すぐさま二発三発と銃声が続く。
だが、何発撃っても栗栖野ミサにはかすりもしない。
「なんで、なんであたらねえええ！！」
「静粛に、ここは神前です」
栗栖野ミサがそう言うと、彼女を囲んでいた男達にどこから現れたのか、十字架が突き刺さった。
男達は、まるで何かの力に縛られるように身を固めて、手に持っていた武器を取り落とした。
「『十字架の戒め（ホーリークロスバインド）』危険はありません。心穏やかに主に祈りを捧げましょう」
そう言って颯爽と、栗栖野ミサは動けなくなった男達の横を通り抜け、尊の居る場所に向かう。
そして情けない事に銃声で腰が抜けていた尊に、そっと手を差し出した。
「遅くなりましたが、主の導きにより参上しました……ご迷惑でしたか？」
昼休みに尊が言った事を気にしてか、栗栖野ミサは控えめにそう言った。尊は良心が痛むのを感じ、だからこそ差し出された手を迷わず取る。
「いや、ありがとう栗栖野さん」
心の底からその言葉が出た事で、尊の中で燻っていた何かが無くなっていった。嫌いだと談じて拒絶した相手が、危険を省みずに助

けに来てくれた。それだけで、全て許せるような気がしたのだ。
（我ながら、現金かな？）
だが人の感情などそんなものかもしれない、ふとした拍子で嫌いになる事もあれば、好きになる事もある。
高校生という、まだまだ子供で多感な時期だからこそのものなのか、それは知らないが。助けてもらっておいて感謝が出来ないよりはずっといい、そう尊は思った。
「……待て、何だこの結界は！？　何をした狂信者！！」
座敷の中心に現れた十字架を指差して、親分が栗栖野ミサに怒声を浴びせる。
「狂信者ですか……そう呼ばれるのも久しぶりですね。確か貴方は『風雲寺組』を仕切る組長であり、『魔葬一族』風雲児家の御当主である、風雲寺炎間（ふうううんじえんま）さんでしたか……」
尊を背に庇うように、栗栖野ミサは親分と対峙する。
「ここはとても良い気場（ボルテックス）の様ですね。日本だと龍脈というのでしたか？　是非ともここに教会を建てたいものです」
強面の親分を前にしても、栗栖野ミサには少しも臆した様子が無い。
「……まさか龍脈の力で魔術を封じたのか？　馬鹿な」
むしろ圧倒されたのは親分のようで。尊には話の半分も理解できていなかったが、あの炎を消し去ったのは、やはり栗栖野ミサの力であったという事だけは理解できた。
だが彼女はそれを否定する。
「いえ、これは神の加護による奇跡。私はただ信じて祈るだけ、奇跡が起こるのは我が主の力です」
大真面目にそう言い放つ栗栖野ミサに、親分達は呆気にとられるが。魔術が封じられているのは事実であり、そうなると別な手段を頼るほかは無い。
「なんでもいい。だが、目黒くんが深書ネクロノミコンを所持しているなら渡すわけにはいかん。あれはこの世に存在してはならない

物だ」
　取り出した拳銃を、尊に向ける。初めて向けられた銃口は縁遠い一般人には現実味が無く、親分の顔の方がよほど恐怖を感じるものだった。
　それでも当たれば死ぬと考えると、やはり下手には動けない。栗栖野の背後に隠れている事しかできない事を、尊はかなり不甲斐なく思った。
「邪な力で命を殺めても、解決にはなりません。ネクロノミコンを危険視する事には同意しますが、目黒さんに危害を与える事は許せません」
「小娘が！！　今はまだいいが、ネクロノミコンの力に染まった時には遅いかもしれんのだ！！」
　本人そっちのけのそのやり取りに、尊は異議を申し立てたかったが、間違いなくこの場で一番無力なのは自分だと自覚している為。口は挟めない。
　しばらく睨み合っていた栗栖野ミサと親分だったが、やがて尊を庇うように立っていた栗栖野ミサは、射線を空けるようにその場をどいた。
「……いいでしょう、それが正しいと思うのなら、その引き金を引いてみたらどうです？」
「え？　は、えええええ！？」
　親分の向ける銃口に、尊は無防備な姿をさらす。まさかこの土壇場で見捨てられるとは思っていなかったので、尊の心は深く傷ついた。
「……本気か？」
　いきなりの心変わりに、怪訝な表情の親分。そして栗栖野ミサは自信ありげに微笑んで言った。
「ええ、ただしそれがどのような結果になっても。それは貴方の責任です」
「いいだろう……」

人一人殺す事など造作も無いというように、親分は拳銃の引き金に掛かる指に力を込める。
（……これは、いや、こうなったら栗栖野さんを信じよう。わざわざ助けに来てくれたんだから）
それにどうせ死ぬなら誰かを恨んで死ぬよりも、誰かを信じて死にたい。そんな格好つけた事を考えながら、尊は膝が震えるのを抑えた。
ただ、神に祈るような事はしなかったのは、尊の無神論者としての意地か。
引き金が引かれ、火薬の爆ぜる音。それと共に何かが砕け散る音と鮮血が座敷に舞った。
「ぐあああああ！！」
「親父！？」
腕から血を流しながら膝を屈したのは、親分こと風雲寺炎間の方だった。誰が何をしたわけでも無く。傍から見れば拳銃の暴発という結果に終わった。
だが、栗栖野ミサはその有様をこう論じる。
「やはり邪な力に頼る事はろくな結果を呼びません。『十字架の裁き（ホーリークロスジャッジメント）』、これは神罰です」
そう言い残し、尊と共に栗栖野ミサは風雲寺家の屋敷を抜け出した。
一つ間違えれば、誰かが命を落としていた筈のその場において誰も死人が出なかったのは、一重に彼女が居た事がその理由であったのは間違いない。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「送ってくれてありがとう」

尊は本日二度目の心からの感謝を栗栖野ミサに伝えた。
屋敷は尊が住む帯瀬間市内にあり、少し歩けば知っている道に出たが、それでもいつまた強面の男達に囲まれるかと思うと、気が気では無かった。
「いいえ、貴方を守る事は主より仰せつかった事。私にとっては当然の行いです」
「ははは、もうそれでもいいや。とにかくありがとう」
栗栖野ミサの宗教じみた物言いも慣れてきたのか、尊は気にする事は無くなっていた。そんな心境の変化に自分で驚きつつ別れを告げる。
「それじゃあ、また月曜に学校で。もう暗いから気を付けて帰ってね」
栗栖野ミサを送っていくべきか尊は考えたが、屋敷での事から察するにその心配は無用だと解りきっていたので、言い出すのも憚られた。
「いえ、大丈夫です。私も同じところに住みますので」
「え？　栗栖野さんもここに住んでるの？」
尊は団地に部屋を借りているので、おかしい事は無いが、栗栖野ミサの言い方は少し違和感があった。
そして生憎と、尊の感じた違和感は現実のものであった。
「今日からですが、私も目黒さんと同じ部屋に住む事にしました。荷物などは昼に早退して、既に運び込んであります」
「ああ、だから昼休みから教室に居なかったんだ……って、ええええええええええ！？」
違和感どころの話では無く、完全におかしい事を平然と言われた。
「昼に目黒さんに言われた事、私なりに考えて答えを出しました。私が信用できないと言われましたよね？　ならばまずは私を知ってもらおうと考えたのです」
「それが一緒に住むって結論に？」
「はい」

（ないないない、おかしい、絶対おかしい。栗栖野さんが変人だとは気付いていたけど、ここまでぶっ飛んだ思考は流石にない）
そりゃ世の中には、好きでもない相手と恋人になったりという話はよくあるが、出会って二日で同棲なんて聞いたことも無い。
一人暮らしの尊にはそれをうるさく言うものは誰も居ないだろうが、そう言う問題では無い。
「駄目駄目！！　高校生の男女が同棲なんて、問題大有りでしょうが！！」
「私は構いませんよ？」
「僕が構うんだよ！！」
想像しただけで疲れ果てるような毎日に、自ら身を投じるような馬鹿は居ない。自分の身は自分で守れることを前提とした、栗栖野ミサならではの言い分だが、尊の事は考えているのだろうか。
「それに風雲寺家にネクロノミコンの事が知られた以上、今日の様な事が又ないとも限りません。そうなった場合、私が近くに居る方が都合が良いと思います」
「ああ、そういう事も考えてくれてるんだ……いや、でも駄目！！」
一応尊の事も考えてくれているだけに、余計に性質が悪い事になっていた。
（ああ、どうすればいいんだろ……）
いっそ簡単に拒絶できれば一番いいのかもしれないが、一度許した相手をもう一度嫌いになる事は難しく。
尊が折れるのは、もはや時間の問題であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0269z/

ネクロノミコンの継承者

2011年12月30日02時46分発行